

# C LINIC magazine

No. 502

明日を創る医療総合誌

平成23年5月1日発行(毎月1回1日発行)  
昭和49年10月15日第三種郵便物認可

2011  
MAY  
5

[特集]

## 医療ツーリズムは成功するか

[Interview]

### 医療ツーリズムの進展は世界的な潮流

多摩大学 真野俊樹氏

[Opinion]

福岡市医師会成人病センター 信友浩一氏  
日本医師会 中川俊男氏

[Report]

医療ツーリズム実証分析  
徳島の糖尿病検診ツアー

[特集 標準予防策と接触感染予防策のポイント]

### 防御具の着脱と使用のタイミング



# 対談シリーズ 維新の蘭学医 関寛齋からのメッセージ

第5回 (最終回)

## 町医者のごころ

～寛齋の思想は社会主義的に非ず～



長尾クリニック院長

長尾和宏氏

参議院議員・医師

梅村 聡氏



※梅村氏は関寛齋の末裔にあたる。

### 開業医を病院に呼び 病診連携の原型を作った

**長尾** 関寛齋が、山梨で梅毒検診に取り組んだ話を伺いました。

**梅村** それだけではなく、山梨では産婆の制度や薬局取締規則を定め、県下のさまざまな医師を集めて生理学の講義をするなど、地域医療の画期的な制度を次々に実施していきま

す。あまり知られていませんが、寛齋

はいまでいう病診連携の仕組みを作りました。「山梨病院に来院するときは、必ず主治医と一緒に来なさい」といったんです。「よくなったら主治医と一緒に帰ってください。そうならば主治医が同じ医療を地域で広めてくれます」と。

**長尾** 病診連携に至っては、ある意味、現代より進んでいます。いまは多くがFAX等で情報提供することが中心ですが、「主治医も一緒に来い」ですから。手取り足取り教えたんでしょうね。

**梅村** 病院と診療所は対立するものではなく、「一緒に患者さんを診よう」ということを、寛齋は身をもって示したのだと思います。

今日の医療崩壊の状況に対して、マスコミは、「医師会は開業医の団体だから、勤務医は自分たちの団体で作った」というように、ことさら対立を煽るような報道をしますが、それはプアーな発想で、勤務医、開業医の別なく、地域で顔が見える範囲の医師が一緒になって医療を行うというのが本来の姿です。地域医療にあまり興味のない病院の先生に紹介状を書いているという実態を改善していかなければなりません。

**長尾** 本当にそれはなんとかしなければなりません。勤務医は開業医を経験していないから、開業医のことはよくわからないでしょう。開業医は昔に勤務医を経験しているのだから、大体わかります。ここは開業医のほうから勤務医に歩み寄るという意識を持つべきではないでしょうか。

実際は、地域に定着して中心に

### 関 寛齋の経歴

西暦	満年齢	経歴
1830	0	上総国山辺郡中村（現在の千葉県東金市）の農家吉井家の長男として生まれる。
1843	13	前之内の関俊輔と正式に養子縁組。
1848	18	佐倉順天堂に入学。佐藤泰然に師事。
1852	22	佐倉順天堂を修了し、前之内で開業。結婚。
1856	26	銚子で開業。
		この頃、コレラ流行し、防疫活動。
1860	30	長崎留学。オランダ人医師ボンベに師事。
1863	33	徳島藩の御典医になり、徳島に移住。御典医として活躍。
1868	38	明治維新。戊辰戦争に軍医として従軍。奥羽出張病院頭取。
1869	39	徳島藩医学校一等教授、病院長に就任。
1872	42	山梨病院長。検梅法を発表して実践。
1873	43	徳島へ戻り、関医院開業。
1875	45	徳島新聞に養生心得を発表。町医者として徳島で活躍。貧者の無料診療や種痘にも取り組む。
1902	72	北海道の斗満原野（現陸別町）へ移住。農地開拓と町医者として住民の診療を行う。
1912	82	子孫から財産相続訴訟を起こされる。
1913	83	服毒自殺。

なっているのは開業医かもしれないが、そうした方法しか1つになれないと感じています。

## 寛齋の思想は貧しい病人の生活保護ではなく就労支援

**長尾** 町医者としての関寛齋で、クローズアップされるのはどこでしょうか。

**梅村** やはり、貧者は無料で診療し、富裕者からは正規料金の何倍も取っていたという事実でしょう。

その行動を評して「社会主義的」などといわれるのですが、彼の真意は違うのです。

寛齋は、無料で診療した貧しい患者には必ず食べ物を届けます。それは、その患者がまた働けるように、社会復帰するよようにということなのです。関寛齋は、いまでいう生活保護的な考えは持っていません。

現代日本の生活保護は、高齢者も若い人も同じ制度になってしまっていますが、これは分けて考えなければなりません。若い人に対する生活保護は、元気になって職を得て、今度は税金を納めて社会貢献してもらうための制度です。ずっと生活を保護するという話ではないのですよ。しかし、いまは「貰わなければ損だ」という考えで医師に診断書を求めてきます。

関寛齋の時代は若い病人もあふれていましたが、寛齋は家族も女中さんも入院患者さんも、皆に同じものを食べさせました。朝から豚肉入り味噌汁を食べて滋養をつけたそうです。再び働けるように、貧者を無料で診療し、食べ物を届けたのです。これが本当の社会保障でしょう。

## 関寛齋終焉の地で遺品を展示 陸別町『関寛齋資料館』



関寛齋資料館の館内ようす

北海道足寄郡陸別町の中心部『道の駅・オーロラタウン 93』の一角に、関寛齋翁の事跡とゆかりの品々を展示した『関寛齋資料館』がある。

佐倉順天堂と長崎のオランダ人医師ポンペに学び、徳島藩御典医、官軍野戦病院頭取、町医者、そして北海道斗満原野の開拓と、怒涛の人生を送った寛齋の年代記に沿って、多数の資料が展示されている。

そのなかには、幕末、維新の医療史に貴重な1頁を書き加えた『長

**長尾** 自らのお金で貧者への医療を行い、かつ就労支援までしていたのですか。医者が就労支援までやっていたんですね。いや、それは考えたこともなかったです。

## 町医者とは言い換えれば人間を診る医者である

**梅村** 小説『斗満の河』（乾浩著）のなかに出てくる寛齋のエピソードの1つを紹介します。遊郭に往診に行くと、まだ年端も行かない子供が売春をしていた。寛齋は「お前はまだ小さいからそんなことをしてはいかん」とたしなめるだけでなく、売春宿の主人と喧嘩したそうです。小説的な誇張もあるかもしれませんが、少なくとも作者の乾さんは、寛齋はそんな人間だと思っているのでしょう。

いまの時代、そこまでやるのは難しいと思いますが、医者というのはそこまで考えて医療をするものなのだと教えられます。

**長尾** 私もそれに近い場面に遭遇したことがあります。現代にも借金をしている貧しい患者さんがたくさんいますから。

しかし、とてもそんな行動はとれませんでした。関寛齋の話聞いて、正直、自分が恥ずかしくなりました。

**梅村** 関寛齋には、貧しい患者は病を治せばまた働ける、という信念があったということを理解いただきたいと思います。

晩年の関寛齋は、北海道陸別の開拓方針を巡って、農場長であった四男の又一と対立します。寛齋は網走刑務所の囚人たちや地元の開拓民に土地を分け与えようとしたのです。そこでその人たちが自分の土地で働

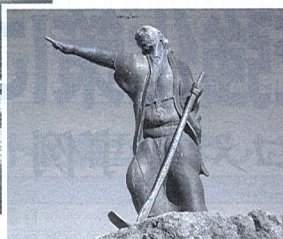
『崎在学日記』や『奥羽出張病院日記』、勝海舟が寛齋に贈った直筆の書、本連載記事でも紹介した寛齋所有の医療器具、人骨標本、奥羽出張病院旗など、貴重な史料が含まれている。

また、晩年の寛齋が関わった斗満開拓村や斗満駅通信所のジオラマ、住まいのレプリカが展示されたコーナーや、寛齋の詠んだ短歌の短冊コーナーもあり、その暮らしぶりがよくわかる。さらに寛齋と親交のあった徳富蘆花（健次郎）が斗満を訪問した際に記した『みみずのたはごと』、司馬遼太郎『胡蝶の夢』の原稿なども展示。

町内には、寛齋を祀った青龍山(史



陸別町内にある関寛齋像



当時実際に使用していた医療器具も展示されている

跡クユベラシャシ跡)、鋏を持った寛齋像(写真)、徳富蘆花歌碑など多数の史跡が点在している。



▲関寛齋資料館外観

【関寛齋資料館】

所在地=北海道足寄郡陸別町大通り

延床面積=336㎡

開館日=毎週火曜～日曜、祝祭日9:

00～16:30(毎週月曜と祝祭日の翌日休館)

利用料金=大人・子ども各300円

問い合わせ先=TEL 0156-27-2123

(陸別町教育委員会)

き、自分の力で飯を食い、自立していくことを願ったわけです。

残念ながら、大規模農場経営をめざす又一の反対に会い、子供たちは財産相続で揉めてしまいました。しかし、ただ単に金を与えるのではなく、土地を与えて自ら働かせるという寛齋の考え方は、就労支援として正しかったと思います。

それは、医者としての目がそうさせたのではないかと思うのです。

「町医者」とは、いまは「開業医」をさす言葉だと思われています。いまの時代と当時は違うので、一概にはいえませんが、患者さんの背景、経済問題、生活環境、家族構成や置かれている立場、思想、そんなところまで踏み込んでいくのが、関寛齋のやり方です。それは長尾先生が著書の『町医者力』のなかで書かれていることと共通する考え方ではあり

ませんか。

**長尾** まさにおっしゃる通りですね。「町医者」というのは、「人間を診て行く医者」と言い換えてもいいでしょう。だから、病院の勤務医にも町医者的な医師がいます。開業医であっても町医者といえないような人もいます。

冒頭に「志」の問題が指摘されましたが、関寛齋から学ぶことは、やはりそこが一番ですね。

**梅村** 少し関寛齋を礼賛しすぎたかもしれません。失敗も多い人です。しかし、開業医、勤務医、大学関係

**長尾和宏** (ながお・かずひろ)

1984年東京医科大学卒業後、大阪大学医学部附属病院第二内科入局。病院勤務の後、1995年兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。現在、医療法人社団裕和会理事長、長尾クリニック院長として外来診療と在宅医療に従事。『町医者力』など著書多数。

尼崎市医師会地域医療連携・勤務医委員会委員長。

者、あるいは官僚であっても、彼のエピソードの1つに触れていただだけで、自分たちの仕事の本来あるべき姿が見えてくるのではないかと思います。寛齋という存在を知っていただだけでも、少しは日本の社会保障がよくなるのではと思っています。

**長尾** 関寛齋に巡りあえたのは、私にとっても幸運です。医者という職業で、これだけの人が明治維新の時代には間違いなくいた。この人を歴史的に検証する意義は大きいといえるでしょう。

**梅村 聡** (うめむら・さとし)

2001年大阪大学医学部卒業後、同附属病院第二内科入局。箕面市立病院、阪大病院で勤務した後、2007年参議院選挙に大阪選挙区から立候補し、128万票で当選。

民主党参議院政策審議会副会長、同「適切な医療費を考える議員連盟」事務局長。日本内科学会認定医。

本企画の主役である関寛齋の末裔にあたる。